

漱石『行人』再考

——二郎の一人称語りを中心に——

河村 民部

拙著『山頂に向かう想像力』（英宝社、一九九六・九）の中で、『それから』『門』に続いて、〈自然〉のテーマのもとに、『行人』を論じた際、詳細にわたるノートを取った中から、テーマの要請するところに応じて、必要な箇所を拾い論を組立た。その際にノートに取っておきながら、どうしても取り上げる余裕のなかつた、しかも大変重要な箇所をいまふたたび拾いあげ、読みようによつては拙著の『行人』論を誤解されかねない部分の補足説明としたい。だからといって前回の拙論の骨組みがいささかも変わるものではないということをはじめにお断わりしておきたい。

今回は二郎の一人称語りの持つ特殊性と限界を考慮に入れながら、二郎とお直の関係だけに絞って——特に和歌山での二人だけの場面と下宿での同場面を中心に——再考する。

拙著所収の『行人』論を書いたときには、残念ながら『行人』に関するこれまでの研究成果に十分目を通す時間的余裕がなかつた。いままじ時間的余裕が出来たので、手元に購入したままにしておいた『夏目漱石作品論集成』『行人』（桜楓社、一九九二）掲載の論文を全部読んだ。その結果、当然のことながら、いくつか考えさせられる点が生じた。

その一つは、橋本佳、伊豆利彦論文が論じている〈次郎説話〉——つまり二郎の語りを重視し、二郎とお直との関係を『行人』の中心に据えて考える——の内容を、『行人』批評の歴史の変遷とは無関係に、私がある方向で拙論中に論じていることを発見したことである。

橋本、伊豆論文はそのうち重松氏を初めとして色々に批評を加えられているのも知ったが、私は依然として、二郎とお直の関係は拙論に書いたように無視できないと

いまでも思う。

和歌山市行きとその前後を含めて二郎の嫂お直への心の傾斜——これを私も伊豆論への反論者同様に「恋愛」とまでは呼ぶまい——は日を見るより明らかである。これを疑うのはよほど男女の關係に疎いか、さもなければ眼力のない批評家である。

* * *

まず一郎——嫂——二郎の三角關係をめぐる伏線は、「友達」篇における「性の争い」という間接的なものを除けば、直接には「兄」(五)から始まるといつてよい。

家人のお貞さんを佐野に嫁がせるべく本人抜きで、二郎や岡田が仲介者となつて、事を進行させ決定する下りで、二郎は次のように言う——

「尤もこんな問題「結婚問題」になると自分でどんどん進行させる勇氣は日本の婦人にはあるまいからな」といった。兄は黙っていた。嫂は変な顔をして自分を見た。

「女だけじゃないよ。男だつて自分勝手にむやみと進行されちゃ困りますよ」と母は自分に注意した。すると兄が「一層その方が好いかも知れないね」といっ

た。そのいい方が少し冷やか過ぎたせいか、母は何だか厭な顔をした。嫂も変な顔をした。けれども二人とも何ともいわなかった。(「兄」五、岩波文庫、以下引用は同書より)

二郎がふと言つたことが、兄、嫂、母にそれぞれの立場での形の違った波紋を引き起こしているのが読み取れる。まず「兄は黙っていた」とは、黙る必然的理由があるからだ。次の母の言葉への兄の返答「一層その方が好いかも知れないね」が、兄一郎の心の中を示唆している。母の言葉は(嫂との關係も含めて)二郎への牽制であるが、兄一郎は、逆に母の言葉を否定する形で、男も女も勇氣を出して結婚なんでものは自らの意志で行うほうがよいというのだ。だから「一層その方が好いかも知れないね」の次に「二郎、お直はどうかね」位のことを一郎は、すでにこの時点で腹の中に持っていると思える。

他方二郎の言葉を聞いて嫂が変な顔をするのは当然だ。「勇氣」云々の問題ではなく、のち程お直が二郎に告白するように、親の手で「鉢植え」にされた結婚生活を送っているお直にとつて、ではそれを「私にやれということなの？」位を含蓄する「変な顔」である。

また兄一郎の言葉を聞いた母が「厭な顔」をするのは、一郎とお直夫婦がうまく行っていないことへの暗示であるし、再び「嫂も変な顔」をするのは、夫一郎の意図するところが分かるからだ。つまりお直への当て付けである。まだここではお直は一郎が自分を二郎の方へけしかけているとは思っていない。

一行がまだ大阪にいる間に、語り手二郎は兄一郎が長男ゆえ、如何に我侷に育ったかを自らの意見として記述し（「兄」六）、そうした兄の像に対し、嫂の方を「寂しい類に片齧を寄せて見せ」とか、「寂しい色沢の類」をして、「その真中に寂しい片齧を有していた」（二六）という風に、嫂の「寂しさ」を意図的に描き込む。そして岡田にも「あの時分から我侷だったからね……／奥さんの方でも随分気骨が折れるでしょう。あれじゃ」（九）と、読者を嫂の立場に同情を抱かせるよう、語り手は巧みに仕掛けているのが分かる。

つづいて三角関係を示す肝腎の箇所を拾ってみると、大阪から和歌の浦への列車の車中での兄弟の会話の中で、二郎の友人三沢の「娘」さんをめぐると、狂気になったその娘が三沢に気があったという風に「何故でも己は

そう解釈するんだ」（「兄」十）というが、これは二郎に対するお直の心の傾斜を疑う一郎の皮肉であろう。したがって、

「ああああ女も気狂にして見なくっちゃ、本体は到底解らないのかな」

兄はこういつて苦しい溜息を洩した。（「兄」十二）

このように続くのである。そしてまさに妻お直を狂気にする方向へと動いてゆくのが一郎の言動である。やがて「帰ってから」（三十一）では、二郎は兄がその狂気じみた言動からお直をまさに狂気にせずにはおかない恐れを抱くに至る。しかしこれはずっとまだ先のことである。時計的時間の順序に戻ろう。

和歌浦到着後、兄・嫂・母と一緒に散歩に出る語り手二郎は、母と自分より前を行く兄夫婦の一間程の距離をおいて歩く姿を取り上げている。母はこのとき嫂の冷淡さを非難して次のようにいう――

「……あれを御覧な、あれじゃまるであかの他人が同じ方角へ歩いて行くのと違やしないなね。……」

(十二)

語り手は「これには多少自分にも同感なところもあつた」(十二)と前置きはするものの、すぐにこのように母の見解を修正してみせる――

けれども我肉親の子を可愛がり過ぎるせいで、少し彼女の欠点を苛酷に見てはいはしまいかと疑つた。(十四)

これにすぐ続くのがよく引用される一郎夫婦の同性質への語り手のコメントであるが、これは引用を控えよう。先ほどお直を非難してみた母が、しかし、すぐさま次のようにお直を評価し直す下りを語り手は記述している――

「一体直は愛嬌のある質じゃないが、御父さんや妾には何時だつて同じ調子だがね。二郎、お前にだつてそうだろう」(十四)

この母への返答の前に、語り手は読者に対し次のよう

に嫂との親しさをむしろ印象づけるようなコメントを書き加えている――

これは全く母のいう通りであつた。自分は元来性急な性分で、よく大きな声を出したり、怒鳴り付けたりするが、不思議にまだ嫂と喧嘩をした例はなかつたのみならず、場合によると、兄よりもかえつて心置なく話をした。(十四)

そうして一郎夫婦の不仲を心配する母に対し、二郎は「その内機会があつたら、姉さんにまた能く腹の中を僕から聞いて見ましょう。．．．」(十四)ということになるのである。

このように語り手二郎は兄夫婦のどこかぎくしゃくした関係を一本の糸として巧みに描いては、その中に自らを距離を置きながら関わらせ、兄との意見の相違や兄の我俣をことさらに点描しながら、嫂の「寂しさ」へと同情を傾けてゆく。

語り手二郎は決して、批評家の多くが言うようには、客観的な語り手ではないのである。

さて私は目下二郎という語り手が客観的ではなく、兄

よりもむしろ嫂の方に同情の多くを傾斜させるような記述を（意図的に？でなければ無意識のうちに）おこなっている跡を辿っているわけだが、さて、昼間の散歩で母との話で兄夫婦について読者にある程度の知識を供給した語り手二郎は、その晩母と一緒に蚊帳の中に寝ようとするのだが、襖一つ隔てた隣座敷に寝ている兄夫婦のことが気になって寝られない場面（十五）は意味深長である。

二郎は隣室の「森閑」とした静けさに「自分の耳を澄まし」て様子を窺っているのである。これからして、二郎の態度は少し変ではないか。そして母には「あんまり寝苦しいから、縁側へ出て少し涼もうと思います」という二郎は兄夫婦のしんとした静かさとは対照的に、月のない暗闇の中に波が砕けて白い泡が動揺するのを見、波の碎ける「どどんどどん」という音をいつまでも聞くのだが、波の砕けて出来る「白い泡」といい、「どどんどどん」という波音といい、これは語り手二郎の心の動揺を示唆するメタファーでしかない。

そしてこれがまさに二郎とお直の和歌山市での一泊の場面——二人の関係を決定的に暗示する場面——へのプレリユードをなしている点を見過ごしてはならない。

その前に兄と二人きりの散歩のときに、兄から「直はお前に惚れてるんじゃないか」（十八）というよく引用される言葉を聞くわけだが、それを語り手二郎は「兄の言葉は突然であった。かつ普通兄の有っている品格にいたいしなかった。」（同）というのだが、本当に「突然」なのだろうか。確かに「兄の有っている品格にあたいしな」い文句ではある。だが、その内容はこれまで語り手二郎が読者に語ってきた彼自身の嫂への同情の傾斜からして、全く寝耳に水というわけではあるまい。何時の日かこのようなことがおこり得ても不思議ではないのではないか。

昨夜寝つかれずに耳にしたあの波の音は一体何だったのか。その波音を聞きながら一体何を二郎は考えていたのか。語り手はその考えていた内容については何も読者に報せてはいないのは何故か。私はそこに語り手が意図的に省略した部分があるのを読む。するとこの兄の「突然」の言葉も、それほど「突然」ではなく聞こえるのである。勿論うわべは「だって嫂さんですぜ相手は。夫のある婦人、ことに現在の嫂ですぜ」（同）と反論するのだが、兄はそうした「形式上の答え」を待っていたわけではない。だから、「ただ聞きたいのは、もつと奥の奥

の底にあるお前の感じだ。その本当のところをどうぞ聞かしてくれ」(同)ということになるのである。勿論そんなものがあるはずがないという答えしか与えられないはずがない。しかしこれも「形式上の答え」でしかない」と読者には知れる。

そこで周知のように、女の心の研究云々ということではメレディスの書簡集に言及し、お直のスピリットを掴んでいないという一郎の嘆き(二十一)に至るわけだが、このような子供じみた態度を取る兄に弟は悲しみを感じると同時に軽蔑を起こしている。

よく二郎の兄に対する傲慢な態度は嫂との和歌山での一泊のち嫂に感化されて生じたものであるかのようにいわれるが、その前にすでに二郎は兄の弱点をちゃんと見抜いてそれなりの対処の仕方をしている点を銘記せねばなるまい。

その晩も二郎は眠れない。当然であろう。

・ ・ ・ 昨夕よりもなお寐られなかった。自分はずいんどんと響く波の音の間に、兄夫婦の寐ている室に耳を澄ました。けれども彼らの室は依然として昨夜の如く静かであった。 ・ ・ ・ (二十三)

ここでも語り手は何を考えていたかを読者に明らかにする義務を怠っている。否、語り手は語り手としての裁量を自由に發揮しているにすぎない。己に不都合なものは語る必要はない。

先ほど「形式上の答え」では満足しなかった兄一郎が、弟に嫂の「節操を試してもらいたい」(二十四)と頼むのは、如何に「途方もない物好き」ではあっても、兄の心理上からは必然的に導きだされた依頼であるといつてよからう。つまり「お前と直が二人で和歌山へ行つて一晩泊つてくれればいいんだ」というわけだが、勿論二郎は「下らない」と「名譽」を盾に断わる。だが結果としてこれを実行に移す羽目になるのは周知の通りである。

これはセルバンテスの『ドン・キホーテ』との関わりで、すでにあるところで論じた通りである(近畿大学文学部論集『文学・芸術・文化』第九巻第三号、一九九八・一二所収「漱石『行人』のソースをめぐって」を参照されたい)。

『ドン・キホーテ』の挿話の中に「とてつもない物好きの話」というのがあって、漱石はどうやら、お直の節操試しのソースの一つとしてこれを使っているフシがある。この挿話では、しかし、友人が友人に自分の妻に節

操を文字通り試してくれ——言葉と贈り物などによる誘惑によって——というのである。一郎は二郎にそのようなことをしてくれと頼んでいるのではない。「二郎、おれはそんな下等な行為をお前から向うへ仕掛けてくれと頼んでいるのじゃない。単に嫂としました弟として一つ所へ行つて一つ宿へ泊つてくれというのだ。不名誉でもなんでもないじゃないか」（二十五）。

このように一郎の依頼は、確かに『ドン・キホーテ』の挿話とは違っている。だが、結果においては、三好行雄氏が（岩波文庫の解説に）言うように、二郎とお直の間に何があつても、なくても、二郎の一郎への報告は〈何もありませんでした〉ということになる。何かあれば、まさかにありますと報告する者はいないだろう。だから答えのわかっている依頼をする一郎は、如何に切羽詰まったとはいえ、やはり「とてつもない物好き」という他はない。

しかもこのような愚かな依頼をした以上、その結果は如何なるものであれ罰として引き受けねばならない。当然のことながら一郎は妻への疑念を深め呻吟する一方で、ついには妻を打擲するに及ぶ。

話を元に戻して、和歌山の二郎とお直の二人を詳細に

検討してみよう。そして私が最初に言った二郎の嫂に対する紛れもない心の傾斜がはたして本当か偽りか、そして本当だとするとどの程度のものかを見ることにしよう。

二人が休憩する御茶家で、二郎はまずこんな所に来たことと言訳をいった上で、いよいよ兄から頼まれた仕事——といっても兄にもっと親切にしてやつてくれということしかできない——にかかろうとするのだが、そのときの己の姿をまず二郎は、このように描写する——

自分はいよいよ改まって忠告がましい事をいうのが厭になつた。そうして彼女の前へ出た今の自分が何だか彼女から一段低く見縊られているような気がしてならなかつた。それなのに其処に一種の親しみを感ずずにはまたいられなかつた。（三十）

ある「親しみ」を感じて嫂に心の接近を許す語り手は、すぐに続けて、兄に対してだけでなく「姉さんは自分の年にさえ冷淡なんですわ」と皮肉のつもりが、そこに「浮気な心」が働くのを意識し、兄に対して良心の呵責を感じる小心者の態をさらすのである。そしてこれもよ

く引用される箇所であるが、兄のためというよりも自分のためにものを言っている己を発見し、このような忠告めいたことをする役割は自分の性には合わないことを悟ったというのである――

自分は、自分にもっと不親切にして構わないから、兄の方にはもう少し優しくしてくれろと、頼むつもりで嫂の眼を見た時、また急に自分の甘いのに気が付いた。嫂の前へ出て、こう差し向いに坐ったが最後、到底真底から誠実に兄のために計る事は出来ないのだとまで思った。自分は言葉には少しも窮しなかった。どんな言葉でも兄のために使おうとすれば使われた。けれどもそれを使う自分の心は、兄のためでなくってかえって自分のために使うのと同じ結果になりやすかった。自分は決してこんな役割を引受べき人格でなかった。自分は今更のように後悔した。(三十一)

嫂の前に出て、二人きりになると、もはや兄のことなどかまっておられず、己の嫂に対する関心事が先行せずにはおれない。そこに語り手は「浮気な心」と「甘い」自分を発見し「後悔」するのである。さよう、兄の事を

忘れているわけではない。兄のことが意識にあるから、良心の呵責に駆られ、己の甘さを「後悔」するのである。だが、後悔をしても嫂の魔力の前ではどうすることも出来ないで、その魔法の網に次第に絡めとられてゆく。いわば蛇に魅入られた蛙の態だ。

二郎が嫂に魅入られないためには彼女のそばに居ないことだ。東京に帰ってから、そのために二郎は一人下宿し、嫂の前から姿をくらすことで、かろうじて難を逃れるのである。だが、身体を遠ざけても、心は遠ざけることが出来ない。それで二郎は次第に神経衰弱に陥っていくことになるのである。

これはまた先走りすぎた。話を和歌山の二人の場面に戻そう。

これに続くのがお直の「魂の抜殻」云々という自己放棄的発言である。何とかして言葉の上だけでも兄と嫂との仲を良くしようとする二郎は、しかし、嫂の涙の前にはなす術がない。

「妾のような魂の抜殻はさぞ兄さんには御氣に入らないでしょう。しかし私はこれで満足です。これで沢山です。兄さんについて今まで何の不足を誰にもいっ

た事はないつもりです。その位の事は二郎さんも大抵見ていて分かりそうなもんだのに……」（三十二）

この涙ながらの訴えは、はたして「鋭い力を持って自分の頭に応えた」のである。語り手は嫂への同情を一段と強め、心を傾斜させてゆく。

若輩な自分は嫂の涙を眼の前に見て、何となく可憐に堪えないような気がした。外の場合なら彼女の手を取って共に泣いて遣りたかった。（三十二）

「外の場合」ではない今の場合には、兄に対する良心の呵責が作用して、「彼女の手を取って共に泣いて遣」ることは出来ない。兄は気難しいが潔白で正直で高尚な男だと弁護する二郎に、嫂はまたしゃくりあげて見せる。見せるというと何だかお直が意識的にわざと二郎を虜にすべく泣いているように聞こえるだろうが、私はそうは思わない。お直は批評家の誰かがいうような里見美禰子流のアンコンシヤス・ヒポクリットではない。

ついでながら、美禰子自身も決してアンコンシヤス・ヒポクリットなどではないというのが私の見方である。

美禰子は女としてあるがままに、自然に振る舞っているにすぎない。美禰子をアンコンシヤス・ヒポクリットというのは女たる者を知らない三四郎の無知の証拠だ。だからお直はここで二郎を翻弄するために媚態を弄しているのだとする解釈には賛成できない。

あくまでも長男をたてて、長男を中心に家を構成する家父長的家庭の長男の嫁としてのお直は、山田晃氏もいうように（前掲書『漱石作品論集成「行人」』、長男の嫁として十分にその任を果たしているといつてよい。そのような評価は、すでに引用した母の言葉「一体直は愛嬌ある質じゃないが云々」（十四）がよく証明している。ただ長男の嫁としてはよくやっているが、一郎の妻としては、母の眼から見ても、二郎の眼から見ても十分だとはいえない所——皆が彼女を「冷淡」と評するゆえんだ——がある。そして一郎自身にとつても妻は不十分どころかその実体の掴めない、彼を狂気に駆り立てずにはおかない存在と映る。

だがそもそもそのような存在に仕立てたのは誰なのか。それは長男として人一倍「我侷」に育った一郎自身であり——後ほど一郎は友人のHさんに、自分がどの位妻を悪くしたかわからない旨を告白している（『塵芳』

五十二)——一個の女性であり、一個の妻である前に家長的的家庭による長男の嫁としての規定である。

第三者として客観的に見ていて、これがわかりそうなものなのに、兄にもっと親切にしろとか何とかいう第二郎は、日頃から心を許している「親しい」間柄だけに、余計にお直の涙線を刺激するに至つたと解釈出来る。

そして嫂にしゃくり上げられると、二郎は「益可哀そうになつた。見ると彼女の眼を拭つていた小型の手帛が、皺だらけになつて濡れていた。自分は乾いている自分で彼女の眼や頬を撫でてやるために、彼女の顔に手を出したくて堪らなかつた。けれども、何とも知れない力がまたその手をぐつと抑えて動けないように締め付けている感じが強く働いた」(三十二)。

嫂に出したくて堪らぬ憐れみの手——漱石には「可哀そうってことは惚れたつてことさ」というのがある(「三四郎」)——を、ぐつと抑えているのが、「何とも知れない力」だと語り手は告白しているが、この力とはいうまでもなく「禁忌」の力である。兄への恐れ、良心のとがめ、不義へのおののきである。

手を出すことが出来ないのです、手で涙を拭いてやる代わりに、「自然口の方から出」る言葉が、嫂を愛撫する

ことになる。その言葉とは先日兄一郎が弟に言った「二郎、直は御前に惚れてるんじゃないか」(十八)と同じ程大胆かつ向こう見ずである。二郎はこともあろうに嫂を捕まえてこう言つたのである——「正直なところ姉さんは兄さんが好きなんですか、また嫌いなんですか」。

これは二郎の言葉による嫂への愛撫以外の何ものでもない。これに対し、勿論嫂も言葉による愛撫をもつて義弟に応えている——

・ ・ ・ 嫂は手帛と涙の間から、自分の顔を覗くように見た。

「二郎さん」

「ええ」

この簡単な答は、あたかも磁石に吸われた鉄の屑のように、自分の口から少しの抵抗もなく、何ら自覚もなく釣り出された。(三十二)

つまり二郎の「ええ」は自然に口をついて出たということである。そしてそれを形容する語り手の比喩に注目してほしい。「あたかも磁石に吸われた鉄の屑のように」とは、のちの「塵勞」(五)で下宿を訪ねて来た嫂が帰

つてのち一人その嫂の顔を想像して頭を狂わせることになる、そのときの比喩がまさに、（磁石に吸い寄せられる鉄片云々）というのである。

さてお直からの言葉による愛撫のお返しはこうである

「貴方何の必要があつてそんなこと聞くの。兄さんが好きか嫌いかなんて。妾が兄さん以外に好いている男でもあると思つていらつしやるの」（同）

二郎は先日兄から「二郎、直は御前に惚れてるんじゃないか」を聞いたばかりである。あたかもこの兄の言葉に符合するような嫂の言葉ではないか。勿論表向き二郎は嫂に兄以外に好きな人などいることを肯定できるわけがない。だから言葉の愛撫はさらさらと二人の間を流れ、お直は二郎にかつて刺繍してやったクッションのことを思いださせる。

「あれ、まだあるでしょう綺麗ね」と彼女はいった。

「ええ、大事にして持っています」と自分は答えた。・・・（同）

これも批評家の誰かが言っていたと思うが、「あれ」というだけでお直と二郎の間で何のことが通じ合うべきに、やはり読者は注目すべきだろう。並の嫂と義弟ではない。

二郎の語りはまことに巧みである。それはここで暴風雨に包まれた和歌の浦を出現させ、言葉の愛撫の世界から二郎を現実へと引き戻すことをやつてのけるからである。現実を引き戻された二郎は、今まで忘れていた兄や母のことを「眉を焦がす火の如く」（三十三） 思い出す。この比喩は先ほどの「磁石に吸われた鉄の屑」という無意識の自然とは対照的に、意識的な自己打擲である。

嫂と二人きりという「非日常」——旅先だけが非日常ではなく、お直と二郎が、嫁と義弟という縛られた関係を脱して、一個の女と男になりうるという意味での非日常——が、どのように一人に作用するかを二郎は語つて、否漱石は二郎に語らせてみせる。はたして言葉だけの愛撫で事は済むのか、はたまた毛よる愛撫が実現するのか。語り手の腕の見せ所である。

台風による停電、電車不通、電話不通という事態でやむなく風雨を突いて車を走らせ御茶家が周旋してくれた宿屋に一泊することになるのは周知の通りである。

電灯の消えた暗黒のうちに坐す二郎は「姉さん怖かありませんか」と近くにいろはすの嫂に声をかけると、嫂は「怖いわ」とはいうものの、二郎は「その声のうちに怖らしい何物をも含んでいな」いことを悟る。お直はこれに続く彼女の言動からして実際何も怖れるものはないのである。怖れているのは二郎の良心なのである。

・ ・ ・ 周囲一面から出る一種凄じい音響は、暗闇に伴って起る人間の抵抗しがたい不可思議な威嚇であつた。(三十五)

この風音は良心への「不可思議な威嚇」の象徴でもある。それに突き動かされるようにして二郎は暗闇の中に嫂の声を捜す。

「いるんですか」
「いるわ貴方。人間ですもの。嘘だと思ふなら此処へ来て手で障って御覧なさい」(三十五)

二郎の良心はまだ作用している。先ほどの言葉の愛撫は手の愛撫には移行しない。

自分は手搜りに搜り寄って見たい気がした。けれどもそれほどの度胸がなかった。

(同)

そして例の嫂による暗闇での浴衣を着るための帯を解く音を聞くという、二郎にとっては、挑発的な場面が続く。そのとき下女が蠟燭を座敷の机の上に立てて行く。

蠟燭の焰がちらちら左右へ揺れるので、黒い柱や煤けた天井は勿論、灯の勢の及ぶ限りは、穏かならぬ薄暗い光にどよめいて、自分の心を淋しく焦立たせた。

(同)

暗闇に聴く女帯の擦れる音は、小心者の二郎の気持を動転させるには十分な演出効果である。蠟燭の「穏やかならぬ薄暗い光」とはまさに二郎の動転し、「淋しく焦立」った心の状態の象徴である。気持のおもくがまさに嫂に近づいて手を出せないことへの「穏やかならぬ」淋しく焦立」った心の象徴である。だから二郎は急にこの場を立って汗を流しに風呂へ行き、「ざあざあ背中を流した」。二郎が流し去ろうと懸命なのは背中汗と

言うよりはむしろ心の汗の方である。

やがて風呂から出てきた嫂が「何時の間にか薄く化粧を施したという艶かしい事妻」（三十六）を二郎が眼ざとく見て取り、下女を聞き手に嫂との間でまさに「艶かしい」冗談のやり取りをするのであるが、言葉ばかりは空しく響く。「裸蠟燭の灯で渦を巻くように動揺」（同）する室の中は、今や二郎の心だけではなくお直の心の象徴ともなる。

自分も嫂も眉を擧めて燃える焰の先を見詰めていた。そうして落付きのない淋しきさでも形容すべき心持を味わった。（同）

この描写からすれば、「落付きのない淋しき」を味わうのは二郎だけではない。お直もそうだと読める。そのお直の方に視点を移す前に二郎にとって外に荒れ狂う嵐はいうまでもなく、それに呼応するが如く彼の心の中で今まさに荒れ狂っている暴風雨の実体がどのように本人によって描写されているかを見ておこう。

便所に立ったとき二郎が窓から眺めた「正体の解らない黒い空」は、一時は母や兄のいる宿のことを二郎に心

配させはするが、

同時に今日嫂と一所に出て、滅多にないこんな冒険を共にした嬉しさがどこから湧いて出た。その嬉しさが出た時、自分は嵐も雨も海嘯も母も兄も悉く忘れた。（三十七）

ここで自己を放擲してブリスに浸りきれば「それから」の代助の世界が出現する。だがそうはさせない良心の声が「嬉しき」を「恐ろしき」に変貌させてしまうのである。

するとその嬉しさがまた俄然として一種の恐ろしきに変化した。恐ろしきというよりも、むしろ恐ろしきの前触であった。どこかに潜伏しているように思われる不安の徴候であった。そうしてその時は外面を狂い廻る暴風雨が、木を根こぎにしたり、塀を倒したり、屋根瓦を捲くったりするのみならず、今薄暗い行燈の下で味のない煙草を吸っているこの自分を、粉微塵に破壊する予告の如く思われた。（三十七）

彼の心の内に吹き荒れている嵐は、今にもその心を「破壊」し、嫂に襲いかからんとする「恐ろしさの前触」であり「不安の徴候」ではあるが、これまた「門」に於ける宗助とお米を襲った大嵐とは違って、この嵐は恐ろしさの前触を意識させ、その前に二郎を尻込みさせる。

さて、嫂の反応の方であるが、その恐ろしさを実際に二郎の眼前に描いて見せ、二郎の心の中で荒れ狂う嵐に応えようとするのが嫂の言葉である。和歌の浦の母と兄の宿を心配する二郎に、お直は、

「もし本当に海嘯が来てあすこ境界を悉皆攫つて行くんなら、妾本当に惜しい事をしたと思うわ」

「何故」

「何故って、妾そんな物凄いとこが見たいんですもの」(三十七)

「では一緒に見ましょう」とは言わないのが臆病者の二郎である。「恐ろしさの前触」に心を捕らわれた二郎は、嫂がせっかく二郎の心の中の嵐に和すべく用意した誘いを、臆病の言葉で「打った切る」のである。

「冗談じゃない」と自分は嫂の言葉を打った切るつもりでいった。すると嫂は真面目に答えた。

「あら本当よ二郎さん。妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌よ。大木に攫われるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」(同)

お直は「真面目に」こういつているのであるが、これに対する二郎の反応は、もはや茶番という他ない。

自分は小説などをそれほど愛読しない嫂から、始めてこんなロマンチックな言葉を聞いた……(同)

お直のいつているのは二郎のいうような「ロマンチックな言葉」などではないはずだ。

「本に出るかせ居で遣るか知らないが、妾、真剣にそう考えているのよ。嘘だと思ふならこれから二人で和歌の浦へ行って波でも海嘯でも構わないから、一緒に飛び込んで御目に懸けましょうか」

「あなたは今夜は昴奮している」と自分は慰撫める如

くいった。

「妾の方が貴方よりどの位落ち付いているか知れやしない。大抵の男は意気地なしね、いざとなると」と彼女が床の中で答えた。（三十七）

かくして二郎の心の中で荒れ狂っていた嵐は、嫂の本物の猛烈な嵐の前にはひとたまりもなく退散を余儀なくされてしまう。もはや二郎の心の嵐もひとまず去ったも同然である。

語り手の二郎は「自分はこの時始めて女というものをまだ研究していないことに気が付いた。」（三十八）といつて、一瞬事件の進行を停止させた形で平生の嫂を振り返って辻褃を合わせようとする。

平生の嫂は「どことなく無気味な感じ」がしないではなかったのだが、「甚だ狎れやすい感じ」に支配されて、ほどよく中和され、それほど意識の全面に出でることがなかったことを反芻する二郎は、嫂と話をしている間「始終彼女から翻弄されつつあるような心持がした。」（三十八）ともいう。しかし「不思議なことにその翻弄される心持が、自分に取って不愉快であるべきはずなのに、かえって愉快でならなかった」（同）。

この最後の感想は、やがて二郎が嫂に対して抱く「青大将」のイメージへと連なっていくことになるのである。

「だから嘘だと思ふなら、和歌の浦まで伴れて行って頂戴。きつと波の中へ飛込んで死んで見せるから」（三十八）

二郎はこの「物凄」い言葉に圧倒されて、嫂をかくまいで興奮させることが何かあるのかと問うと、お直は、

「あなた昂奮昂奮つて、よく仰しやるけれども妾や貴方よりいくら落付いているか解りやしないわ。何時でも覚悟が出来ているんですもの」（同）

お直のこの最後の言葉は、二郎への最後通告的な誘いの文句である。「あなたがその気ならば、私は応じる覚悟が出来ている」と解釈出来る。

だがすでにお直の物凄さを見せつけられた二郎の嵐は去つたのであり、二郎の心に残されたのは、女というのは恐ろしいもの、「無気味」なもの、また自分は女というものの正体がわかっていなかったということである。

結局はお直のように「死」と引替えに二郎は己の「ロマンチックな」欲望を満たす覚悟のない臆病者、批評家諸氏のいうところの、「怖れる男」である。

したがって、そうした二郎には嵐の去った翌朝の「明らかな光」の中で嫂を見て、彼女の眼に彼が期待していたような「浪漫的な光は射していない」（三十九）いは当然のことだといわねばなるまい。二郎に残るのは、まさに今はじめて気づいた「正体の知れない嫂」像であった。心の嵐——これは二郎自身が嫂の前において結局のところ自己演出したということになる——が去ったあとは、語り手自らがいうように、「氣の抜けた麦酒のような心持」（三十九）になるのは当然で、先を行く「涼しそう」な嫂の姿はまさに「正体の知れない」女の姿でしかないのである。

繰り返しいうが、二郎さえ死をも覚悟であり得たなら、自己演出して見せた嵐に身も心も翻弄され、代助の味わったであろうようなブリスを味わうことも可能であったであろうし、また宗助のように大風にさらわれ打ち倒され、気が付いてみると二人とも砂だらけであったということになったであろう。

あわやというところで二郎を怖れさせ彼の姿を讀者の

眼に茶番（とあえて呼ぼう）にしたのは、臆病であり、のちほど二郎自身が反省する言葉を用いるならば、「卑怯」のなさしむるところである。だが臆病といい卑怯といっても、その拠つて来たる根本は何かという点、兄への怖れ、不義への怖れ、家族そのものの呪縛であろう。二郎の場合には、代助、宗助ほどに自然の赴くままに動けない何かがあったということなのだろう。

だが事は現時点においての話である。二郎の心の嵐は一度は確かに去った。だが、女というものは「正体の知れない」ものと知覚しはじめた二郎が、嫂の魔力から逃れおおせるといえるのだろうか。

ここで終つても、二郎とお直の関係だけに限つていえば、立派な短篇が成り立つ。だがこれは長編小説である。ここで終つては惜しい。そして二郎の嫂の魔力からの逃亡は依然として続くのであり、嫂の的確な包圍網は徐々に徐々に二郎を取り囲んでくるのである。

* * *

和歌山の一夜に続いて主として私が取り上げようとするのは、例のもう一つの二人きりの場面——さよう、彼岸過ぎの雨の夜に二郎の下宿を訪れる嫂——とそれに続く場面である。だがそれに至るまでに必要な二人のその

後の関係を語り手にしたがって点描しておかねばなるまい。

*

さて嫂との一夜が明けて和歌の浦の宿に戻った二郎は、それまでの二郎とは少しばかり変化している。つまり嫂への「同情」が加わった分だけこの回想録を書いている時点で後悔するように、「驕慢の発現」（四十二）を見る。語り手は今の時点で、こうした己の態度の変化を嫂の態度が「乗り移つ」たと推測している。そして「今になって、取り返す事も償う事も出来ない」（四十二）といたく懺悔するわけであるが、「取り返す事も償う事も出来ない」とは一体どういふことをさすのであろうか。単に深い悔恨の意味なのか、あるいはもはや兄との間には話することも出来ないような状態——例えば一郎が死んだとか狂人になったとか——が出来したということなのだろうか。いずれにしろ、和歌山市から帰った二郎にはこのような変化が生じており、回想時点の今とその事件当時とが特に繰り返し対比され、懺悔の対象となつていることだけはいっておきたい。（四十二～四十三参照）

『行人』という小説はお直を如何に解釈するかで読み

が大いに違ってくるというのが批評家の一致した意見である——そこで少し二郎の観察するお直のイメージを中心に話を進めたい。

少し前に嫂から翻弄される二郎は自分のその心持を「不愉快」であるべきはずが「愉快」（三十八）だと表現していることに言及したが、そのときの「不愉快」「愉快」を的確に定着させたのが「青大将」のイメージである。

和歌の浦の宿に帰ったときに感じた兄一郎の「針鼠のように尖っている」感じを嫂が夫の所へ行つて「十分か十五分話しているうちに、殆んど警戒を要しないほど穏かに」（「帰ってから」）「治めてしまった、その嫂の「靈妙な手腕」を思う語り手は、それを「柔らかな青大将」とイメージしていくのである。その青大将が自由自在に兄の「精神」を（身体ではない——語り手は兄の身体ではなく精神とわざわざ断わっている点に注意——）締め上げたり緩めたりするところを東京に帰る夜行列車の寝台の中で夢想する。

・ ・ ・ その寐ている精神を、ぐにやぐにやした例の青大将が筋違に頭から足の先まで巻き詰めている如く

感じた。自分の想像にはその青大将が時々熱くなったり冷たくなったりした。それからその巻きようが緩くなったり、緊くなったりした。兄の顔色は青大将の熱度の変ずる度に、それからその絡みつく強さの変ずる度に、変った。(「帰ってから」一)

ともかくにもあの「針鼠のように」逆立っていた一郎の精神は今嫂の柔らかい青大将に絡み付かれ、眠りかけているのである。雨が窓から降り込むといって嫂、母そして二郎が起きて騒いでいても一郎は「聖者の如くだすやすやと眠っていた」(同一)。

さらにそれを回想する二郎はこの眠りを「今でも不審の一つになっている」(同一)というが、これについては私にもあることが想像出来る。だがそれについて述べると嫂と義弟とのテーマからは脱線するし、時間が長くなるので、いずれ別の機会に譲って、ここでは語り手二郎自身が、兄の精神に絡み付いている「柔らかい青大将」に、兄のように精神ではなく、「身体」を絡まれるような気になり、「不愉快」と同時に「愉快」を感じた点に注目しておきたい。しかも寢台は一室に四つあり、嫂の上が二郎、母の上が一郎という配置になっている。

つまり嫂の上に二郎がいて、下にいる嫂のことを「どうしても忘れる事が出来な」(同一) い二郎が嫂について想い描くのが、この「柔らかい青大将」のイメージなのである。

兄の「精神」対弟の「身体」のコントラスト、寢台の上と下の二郎と嫂の重なり——ここまでくれば、何をかいわんやである。途中で窓から雨がしけ込んで嫂の窓を閉めに降りた二郎と嫂の仲をわざわざ母が起き出して邪魔に入る場面は、もはや付け足しにすぎない。

語り手のいうように、かくして一行は東京の自宅に戻ったわけである。私のこの論での関心は繰り返しいうが、嫂と義弟の關係に絞られているので、その他の人物は出来る限り切り捨てさせて頂く。

さて嫂に関するイメージで、「柔らかい青大将」もさることながら、これまでも彼女の「淋しさ」に関するエピソードには幾度か言及してきた。「淋しい色沢の頬」、「淋しい片鱗」、「淋しい笑い方」という風に。そしてこの形容は二郎の友人三沢の愛した「娘さん」にも、また大阪の病院に三沢と同時に入院してきた芸者の女にも、はたまた後ほど二郎の父が語る女景清にも当てはまる。これらは皆「淋しい」表情の女たちであり、漱石の描く

女性に特徴的な性質である。

そして漱石の男性たちはことごとくこの種の女性の虜になる。『行人』以前には『それから』の三千代がそうであり、『虞美人草』の小夜子がそうである。そうした意味では三千代、小夜子は『行人』のお直に繋がっているものであつて、お直解釈の前提条件の一つともなっているのである。この条件を無視して一方的にお直を悪女の如く酷評する（そうした評者もいる）のはやはり問題である。

だからといって、私がただちに三千代と同じことをお直がすると考えているわけではない。ただしその可能性もなくはないと考えていることは確かであるが、これはまたのちに触れることにしよう。

今は三千代、小夜子に続く「淋しい」表情の女、あるいは存在そのものが「淋しさ」を本質とする女がお直だけだけ言っておきたい。語り手の観察によれば、東京に帰ってから嫂は、日常生活の中に復帰して、「何時もの通り淋しい笑い方をして『ええ直御後から参ります』と答えた」（「帰ってから」三）。

またこのようにも表現されている――

嫂は平生の通り淋しい秋草のように其処らを動いた。そうして時々片脛を見せて笑つた。（同三）

ことに「淋しい秋草」といえば『虞美人草』の小夜子のイメージに通い合う。私はすぐに「真葛ヶ原に女郎花が咲いた・・・」という『虞美人草』の美しいパセージを思い出す。小夜子も小野さんに長い間無視されてきた「可憐な」女、忍耐の女である。

私は拙著『山頂に向かう想像力』の中で自然観を中心に漱石の『行人』を扱った際に、お直の性格付けとして『明暗』の清子が体現していると思われる則天去私に近いものをお直も持つていりとして、色々な側面を持つお直の性格の中で、特にこの部分を強調してみせた。今もこの強調が間違っているとは思わないが、誤解を生むかも知れないので、少し説明を加えておくことにする。

批評家の中には、このような系譜にお直を位置づけないで、『行人』では十分に描き出されなかつたお直の内に立ち入って、お直の視点から描き出そうとしたのが『道草』のお住であり、『明暗』のお延であるとして、お直、お住、お延という系譜を見る人も多い。そしてこの後者の考え方もそれなりの妥当性を持つていと承認し

ないわけにはいかない。

そうではあるが、三千代、小夜子、お直そして清子という風が続く一貫した系譜の成立可能性を、やはり私は捨てることが出来ない。彼女たちの特質は、先ほども触れたように、その活発な活動性にあるのではなく、むしろ則天去私的なその受動性にある。それが語り手に「可憐な」女、「忍耐」の女、そして「天真の発現」の女としての像を結ばせているのである。

旅にあつて非日常の中にひと時身を置いたお直が、そのときに限つて日常の受動性の枠を破つて二郎に対し活動的に働きかけたにしろ、再び日常の中に立ち戻つた後は、いつもの「淋しい笑い」を浮かべ、「秋草のように」家事にいそしむ姿は、まさに二郎ならずとも、憐憫の情を禁じえない。私には特に小夜子のイメージとオーバーラップして映るのである。

彼女らは「我」を捨て去つて自分の運命に身を委ねた姿を呈している。私が特に彼女たちを則天去私的と呼ぶのはこうした意味においてである。漱石の描く男性主人公たちが「我」をはり通して苦悩するのとは対照的である。

ただし彼女ら女性主人公は一方的に受身的に運命に身

を委ねてばかりではないという点も断わつておかねばならない。先ほども触れたように、特に非日常的状况に置かれた場合、積極的にその状况に応じて行動することの出来る人でもある。『それから』の三千代は雨の中に自己を放擲し、人工を去つて自然につくことを選んだし、『虞美人草』のあのおとなしい小夜子であつても、動き出した運命にしたがつて上京し、積極的に小野さんの妻となるではないか。

お直の場合、彼女は和歌山市での暴風雨に閉じ込められた二郎との一泊という非日常に身を委ねようとしたではないか。それを兄だの母だの名譽だのを持ち出して回避したのは二郎の方であつたことはすでに見た通りである。

このように所与の状況——つまりこれが運命あるいは自然であるが——に消極的、受動的にばかりか、積極的にも身を任せるのを、私は則天去私と呼ぶのである。こうした意味でお直はやはり則天去私的側面を強く持った女である。

*

さて二郎は傍観者としてそばにいながら自らは積極的

に動くことはないが、嫂の姿に注意を怠らない。二郎の

目を通して嫂の姿を追ってみよう。

例えば一人娘を風呂に入れておるときは嫂は二郎の耳には次のように聞こえる――

芳江の笑い声の間には慥に、女としての深さのあり過ぎる嫂の声が聞こえた。（「帰ってから」五）

「女としての深さのあり過ぎる声」とは一体どういう種類の声をさすのであろうか。余談ながら、中村真一郎『時間の迷路』（中央公論、一九九三・七）という小説の中で、深い声の持ち主は西洋人の女の特徴で、日本人の女には少なく、声が深いのは、性的な強度、深さのパロメーターだという旨の興味深い指摘がなされている。確かに和歌山の一泊の場面で嫂のエロスに二郎が翻弄されたあげく、東京への夜行の寝台の上では「柔らかな青大将」に身体を絡み付かれるところを夢想する経緯は我々のすでに見たところである。

これは拙著『山頂に向かう想像力』所収の『行人』論で触れたが、お直のエロスの自然の発現のもう一つ別の箇所を引用しておこう。勿論それを目ざとく観察するのは、あの和歌山での夜に嫂の化粧を察知したのと同じ人

物の語り手二郎であるのは言うまでもない。そしてそれは二郎の側の嫂のエロスへの関心の深さを示唆するものである点も言うまでもなからう。

場面はついに家を出る決意をした二郎が最後に兄にその報告に行ったとき、兄から例の「ペパオロとフランチェスカ」を聞かされてうんざりしていると、下から嫂が娘の手を引いて階段を上がってくるのに出くわすところである。

扉の敷居に姿を現した彼女は、風呂から上がりたてと見えて、青味のさした常の頬に、心持の好いほど、薄赤い血を引き寄せて、肌理の細かい皮膚に手触を挑むような柔らかさを見せていた。（「帰ってから」二十八）

ここにははつきりとあの「柔らかな青大将」がいる。東京に帰ってからは嫂と二人きりになる機会はなく、話をする場合も少ないと語り手は記述しているが、それにも関わらず、和歌山の一夜で嫂のエロスの世界に目覚めさせられた二郎は、もはや後戻りすることは出来ない。

ここで少し嫂を離れて、語り手二郎が家を出て下宿を

することを決意した理由を簡単に振り返っておかねばならない。先ずは家人のお貞さんが近々結婚ということで一郎はお貞さんに忠告のつもりで、女は結婚すれば「人間の品格が墮落する」(同六)から気をつけた方がいいと言つて、お貞さんを泣かすが、そのような言葉を使うのは一郎の頭に、結婚によつてスポイルされてしまったお直という固定観念があるからである。兄は常にお貞さんとお直を比較して考えているのを観察者の二郎は見て取つている(「帰つてから」七参照)。

これは直接には二郎に関係のない兄夫婦の問題のようであつて実は、二郎がその夫婦不和の遠因と目されてゐるのを本人が知らぬわけではない。まさか兄は二郎がお直と不義を働いたなどとは思つてはいないだろうが、兄が二郎に立腹するのは、二郎が己の感情を「誠実」に語らないところに原因がある。

勿論二郎にすれば嫂への同情の深化と同時に目覚めさせられた嫂のエロスへの関心を、兄の要請通り、率直に、誠実に語るわけにはいかない。

他方妹のお重は口に出して二郎の嫂びいきを云々し、嫂との直接対決は日常茶飯事である。母親も和歌山以来特に二郎と嫂との間柄を疑つてゐるフシが二郎には見え

る。兄の機嫌をよくするために早く嫁をもらつて家を出るよう忠告する母が、実際二郎が家を出るといふと、「二郎たとい、お前が家を出たつてね……」(同二十四)といふ。

さらに二郎は友人の三沢からも、家を出て早く結婚したほうが、嫂の為だといふことをはつきりときかされる。「君がお直さんなどの傍に長く喰付いてゐるから悪いんだ」(同二十三)。

まさかと思つてゐた友人までが、自分のことをこのように思つてゐるのを知つた二郎は「驚きと疑いの眼を三沢の上に注ぐ」。

かくしてお貞さんの結婚問題に端を発して、お重とお直の確執、母および友人の心配と忠告等々が相まって次第に二郎が我家に家族の一員として居づらくなつてくる。そして二郎に家を出させるその最たる原因は、いうまでもなく二郎と兄一郎との直接の衝突である。その誘因となつたのが、父の話す女景清の逸話だ。逸話の詳細にわたつてはここでは省略する。要は父が友人の使いでこの女景清にいい加減な出鱈目をいつて女をなだめたことが、真実のみを徹底して求めようとする一郎を立腹させた点にある。

一郎は虚偽と真実の間を適当にうまく生きている父や二郎を許容しえないのである。それがこれまで嫂との一件を兄に報告すると約束しておきながら、のらりくらりとすり抜けて来た二郎の不誠実に対する一郎の癩癩玉の爆発となる。

「お父さんのような虚偽な白白を聞いた後、何で貴様の報告なんか宛にするものか」「帰ってから」二十（二）

この兄との間の決定的な対立が二郎をして家を出る決意を固めさせたことは疑う余地はなからう。

それにしても兄一郎の和歌山旅行から今に至るまでの言動はどう考えても不自然だ。和歌山で二郎にお直の節操を試せといったとき、ひよつとして一郎はもしお直もお前もその気が本当にあるなら、二人一緒になるのが自然ではないかということ、本当は言いたかったのではないか。

確かに二郎が兄よりも前からお直を知っていたということは、二郎自身が述べている（「帰ってから」二十参照）。そのことも遠因となつて、母にもお直にも三沢に

も、そして肝腎の兄にも、不義とまでは言わなくとも、ある疑いを抱かせる結果となった。一郎は元から知り合いの二人の日常での親しい言葉のやり取りを聞いていて、そこに人工の作用で一緒になった自分達夫婦よりも自然そのものが結び付けている二郎とお直の関係を羨むようになったのではないか。一郎自身は、自ら言うように、学問に没頭して来たおかげで、人を「綾成す技巧」（「帰ってから」五）を身につける暇がなかったと反省する。

そこで一郎は、もし二郎とお直が結びつくのが自然であるならば、そうするのが一番よいのではないか、自分とお直が結びついて一緒にいても、結婚すれば女は夫によつてスポイルされるといふ固定観念を持つ一郎にすれば、お直は決して幸せにはなれまいし、彼自身もそうだと、思ったのではないか。

だからこそ、一郎は二郎が家を出ると言ったとき、誘発するが如く「一人出るのかい」（「帰ってから」二十七）と聞くのである。

二郎はこれを「奇異な質問」と思い、「小時茫然として兄の顔を打ち守つてい」と、

兄は自分の顔を見て、えへへと笑った。自分はその笑いの影にさえ歇歎的里性の稲妻を認めた。

「無論一人で出る気だろう。誰も連れて行く必要はないんだから」(二十七)

このように二郎は兄の言動にヒステリ性を読むのであるが、これまで私が縷縷述べて来た二郎の和歌山以来の嫂への同情とエロスへの目覚めと用意周到な観察からして、この質問は、私には、あながち「奇異」には響かない。そして二郎がそのヒステリ性を読む兄の「えへへ」という笑いと引用したそれに続く言葉には、ヒステリ性よりもむしろ、勇気があるなら、本当にそうしたいのであれば、お直を連れて出てはどうか、という誘いがあると取れる。

そのように一郎の一見奇異と思える言動を読み解いていくと、この話にすぐ続けて、一郎がなぜ「パオロとフランチェスカの恋」の逸話を語るのかがよくわかる。なぜ肝腎な夫の名前が忘れられて、不義の弟と妻の名前だけが後世に残るかということへのよく引用される一郎の解釈が続くのである――

「己はこう解釈する。人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸した恋愛の方が、実際神聖だから、それで時を経るに従って、狭い社会の作った窮屈な道徳を脱ぎすてて、大きな自然の法則を嘆美する声だけが、我々の耳を刺激するように残るのではなからうか。尤もその当時はみんな道徳に加勢する。二人のような関係を不義だと云って咎める。然しそれはその事態の起った瞬間を収める為の道義に駆られた云わば通り雨のようなもので、あとへ残るのはどうしても晴天と白日、すなわちパオロとフランチェスカさ。どうだそうは思わんかね。」(帰ってから) (二十七)

これを聞かされた二郎は兄の主意がまったくわからず、なかば頭にくるのを、兄はさらに続けていう――

「二郎、だから道徳に加勢するものは一時の勝利者には違いないが、永久の敗北者だ。自然に従うものは、一時の敗北者だけれども永久の勝利者だ……」(同二十八)

これに対し二郎が返事をしないと、兄はさらに

続けて、

「相撲の手を習っても、實際力のないものは駄目だろう。そんな形式に拘泥しないでも、実力さえ儘に持っていればその方がきつと勝つ。勝つのは当たり前だ。四十八手は人間の小刀細工だ。膂力は自然の賜物だ。……」（同）

このような兄の言葉を二郎はどう受け取っているかというと、「影を踏んで力んでいるような哲学」（同）と思うのである。

兄の最後の言葉はこうである――

「二郎、お前は現在も未来も永久に、勝利者として存在しようとするつもりだろう」（同）

自分が敗北者であることを認めた上で、二郎の勝利者としての宣言を、弟に代ってやっている訳だ。

二郎の反応とは違って、兄二郎の言い分とその理由を、狂気扱いしないで、積極的に認めるとすれば、勝利者になるつもりがあるのならば、それだけ「膂力」を出して、

「自然」に従って、「狭い社会の作った窮屈な道徳を脱ぎ棄て」るがよいという、誠実な忠告と読める。

まさに二郎は兄、母、妹、友人、そして家族制度そのもの、社会、社会道徳といった、いわば「形式」に拘泥して、本能の赴くままに行動し得ていない。

兄は二郎に先ほど「四十八手は人間の小刀細工だ」と言ったが、和歌山の一夜に「妾死ぬなら首を括ったり咽喉を突いたり、小刀細工をするのは嫌いよ」（兄「三七七」と言ったのは、お直自身ではなかったか。

兄は兄で弟に「小刀細工」はやめてあるがままの自然につけというし、嫂は嫂で「小刀細工」はやめて、一緒に死にましようというのである。嫂はすでにあの和歌山の一夜の場面で、二郎に対し自分はいつでも「覚悟が出来ている」と語ったことを我々は思い出す必要がある。二郎さえその気になれば、お直は何時だつて、それに応じ何でもするという宣言であった。それをぐずぐずと傍観者になりすましていて、あげくの果てが、嫂を置き去りにして一人で家を出るというのである。

とくれば、兄の「一人出るのがかい」という誘発は無論のこと、嫂からはもっと強烈な肘鉄を食らうのは当然である。

自分は何気なく「ええ少時出る事にしました」と答えた。

「その方が面倒でなくって好いでしょう」

彼女は自分が何か言うかと思つて、凝と自分の顔を見ていた。しかし自分は何ともいひなかつた。

「そうして早く奥さんをお貰いなさい」と彼女の方からまたいった。自分はそれでも黙つていた。

「早いほうが好いわよ貴方。妾捜して上げましょうか」とまた聞いた。

「どうぞ願います」と自分は始めて口を開いた。

嫂は自分を見下げたようなまた自分を調戲うな薄笑いを薄い唇の両端に見せつつ、わざと足音を高くして、茶の間の方へ去つた。(帰つてから) 二十五)

この嫂の二郎に対する反動的で冷淡な態度は、再び繰り返される。それは先ほど兄との最後の話の場面で、風呂上がりの嫂が娘の手を引いて兄の書齋に来て、例の「手触りを挑むような」柔らかく肌理の細かい皮膚を見せつけ兄には普段にない「家庭の夫人らしい愛嬌を見せ」兄を籠絡しておいて、片や二郎に対しては、彼が書齋を出るとき、「嫂は一面識もない眼下のものに挨拶で

もするようになつて、つと頭を下げて自分に黙礼をした。自分が彼女からこんな冷淡な挨拶を受けたのもまた珍しい例であつた」(二十八)。

この引用にもその前の引用にもあるように、なぜ嫂がこのようないつもと違つた反応を自分に対して見せるのか、二郎はその理由はわかつていようが、書いていない。まさかにはわからぬ訳ではあるまい。だが書かないでいる。書かないでいるからといって嫂の態度が何の影響もその後の二郎に与えない訳ではない。

否、家を出て一人下宿住まいをはじめた二郎は、賑やかな家庭から急に一人きりになつたせいも確かにないではないが、設計会社の仕事に次第に身が入らぬようになつてゆくのは注目すべき事実である。

その間に友人の三沢や事務所のB先生を媒介に、兄の異常な精神に関する噂が二郎の耳に入つて来、二郎の良心を痛ませるが、事は兄に関するばかりでない。事務所の持主であるB先生からは「今日は君いやに意気銷沈しているね」(二十九)と指摘されたりする。「そうして心の内で、自分こそ近頃神経症にかかつているのではなからうかと不愉快な心配を」(二十九)するようになる。

私が問いたいのには、二郎の「意気銷沈」や「神経症」

の原因は、はたして、何であるのかという点である。私
の知る限りでは、一郎の神経症に関する研究は多く見ら
れるが、こと二郎を神経症と看做し、その原因を探ろう
とした論文は、残念ながら、お目に掛かったことがない。
拙著『山頂に向かう想像力』にも書いたが、私見では、
二郎は確かに神経症に陥っているのであり、その原因は
言うまでもなく、二郎はわざと気づかぬ振りをして避け
てはいるが、嫂お直から離れたことにある。嫂のあの冷
たい反応はその効果を發揮しはじめたのである。

*

これと平行して三沢から例の精神病で死んだ「娘さん」
への忠誠心を繰り返し聞かされると、二郎の想像は、
「この時その美しい眼の女よりも、かえって自分の忘れ
ようとしていた兄の上に逆戻りをした。そうしてその女
の精神に崇った恐ろしい狂いが耳に響けば響くほど、兄
の頭が気に掛つて来た。兄は和歌山行の汽車の中で、そ
の女は慥に三沢を思っているに違いないと断言した。精
神病で心の憚が解けたからだとその理由まで説明した。
兄はことによると、嫂をそういう精神病にかからして見
たい、本音を吐かせて見たい、と思っているかも知れな
い」（帰ってから）（三十一）。

二郎は三沢の「娘さん」を狂わせたその「愚劣な親」
ないしは「軽薄な夫」と嫂お直と夫一郎とをバラレルの
関係で見据えはじめている。その娘さんが今でも生きて
いたら、彼女の親や夫から「永久に彼女を奪い取って、
己れの懐で暖めて見せるという強い決心」（同）を三沢
の表情に読み取る二郎は、それを嫂お直の上に応用せず
にはいられぬ心境に追いやられていく。もし兄一郎が嫂
を精神病に仕立て上げようとしているのであれば、これ
は大変なことだ、そうさせないために自分のすべきこと
は一体何か。二郎の心の中をわかりやすくパラフレイズ
するとこのようになる。

そこで嫂をそのような危険から救うという目的で、二
郎は兄一郎の精神状態に関する探索、否、探偵を開始す
るのである。

ところが、である。兄のことが気がかりで番町の家に
出かけはするものの、「直接兄に会うのが厭なので、二
階へはとうとう上がらなかつた・・・」（三十二）とい
うが、本当に兄のことが心配ならば、「会うのが厭云々」
と言っている場合ではないではないか。二郎は卑怯にも
こっそりと母から兄の様子を間接的に聞いたりするの
だ。

さて二郎が家を出たことで、あの風呂上がりで見たように、嫂が兄に対してあれほど機嫌の好い状態が続いているのであれば、少なくとも兄夫婦の間はうまくいくはずである。

にもかかわらずそうはいっていないことが、三沢やB先生などから間接的に伝わってくるし、二郎は自らの眼でも、兄夫婦の異常な関係を見ることになる。その一つが結婚式直前のお貞さんを一郎が二階の書齋に呼んで話をする下りである。

話の内容の不可解さもさることながら、そのときに嫂が「不機嫌を蔵そうとする不自然の努力」(三十四)をしたこと、また「嫂の唇には著しい冷笑の影が閃めいた」(同)ことを一郎が見抜いた点が肝腎である。

これはすでに指摘した点ではあるが、かつてまだ二郎が実家にいたころ、眼の前でお貞さんは一郎から「結婚すると人間の品格が落ちる云々」と聞かされて、泣かされたことがある。そのとき一郎は、すまなかったと言ってお貞さんに詫びた。したがって、ここで再びお貞さんをわざわざ呼びつけて、同じことを、いかに自分の妻お直への面当てという意味があるにせよ——そしてこの場合わざわざ全貞の前で、妻への面当てをする必要はまっ

たくない——繰り返す必要があるとは思えない。

嫂が引用のように冷笑を浮かべ、不機嫌を隠そうと不自然にも快活に装うのは、単なる夫への嫉妬というようなものではなく、他に理由があるからではないか。

兄と呼ばれて二階に行くときのお貞さんの顔は「上気したようにほっと赤くなつた顔」(三十四)であり、また話が終つて下に降りて来たときには「依然として耻ずかしそうに赤く染つていた」(同)。そして二郎はお貞さんの眼に涙の跡を発見したように思うと書いている。

以下は私の大胆な仮説と看做して読んでもらつて結構である。

二人の話の内容を知る者は「彼ら二人より以外に、恐らく天下に一人もあるまいと思う」(同)と二郎が語っているが、ひよつとして嫂は夫がお貞さんに言ったことの内容を知っているのではないだろうか。二郎はお貞さんを、家の中で年の割には「一番初心な女」(三十三)だという。一番初心で飾ることの知らないお貞さんこそ、Hさんの手紙の中で語られている兄のお貞さん像から推測すると、実は正直一途な兄の心を捉え得た存在であつたはずである。嫂のお直はそのところを察知しているのだ。一郎は正直な気持をひよつとしてお貞さんに語つ

たのではないか。一郎は父が話した盲目の女にも同情の涙を禁じえない男である。ひよっとすると同じく身分の違ってお貞さんにも、妻お直への反動も手伝って、心が動いたかもしれない。

あるいは二郎が母からふと聞かされることに中に、兄の神経衰弱の話題から、「尤もこの間少し風邪を引いた時、妙な嚙語をいったがね」（三十二）というのがある。ただし母は「何熱の所為だから、心配する事はないんだよ」（同）と、結局は二郎にも語らないでしまう。この嚙語とは二郎と嫂のことではあるまい。ここではそのように考える理由が見当らないからだ。

「妙な嚙語」というからには「妙な」内容のものなのだろう。その嚙語がたとえば二郎と嫂との関係に関わるものであったとすれば、母は不意打ちを食らったり、「妙な」とは思はずがない。唯一「妙な」というのは、女のことだろう。そう考えると、結婚をして家を出て行くお貞さんに、最後に話があるといつて、皆の集まっている前で、わざわざ彼女を二階の書齋に呼び寄せるだけの理由があることになる。つまり、これはあくまでも推測であるが、一郎は自らの「不義」をお貞さんに詫びたのではないだろうか。志賀直哉の「大津順吉」に似たよ

うなことが一郎とお貞さんの間に、誰にも知られずに、あったのではなからうか。

ことによると、父が語る女景清への一郎のこののほかの同情は、一郎自身の実感するところのお貞さんへの同情ではなかったか。父が語った父の友人の坊ちゃんと呼べた女との逸話は、実は一郎とお貞さんとの関係を暗示するための、巧妙な仕掛けになっているのではないか。ただ単に父の軽薄さとその血を引く二郎への批判および二郎の實質上の家出理由というだけではなく、あれほど一郎を激怒させたのは、激怒すべき要因を一郎が自らの胸に持っていたからではないのか。

これは兄夫婦の二郎を中に挟んでの不和というだけではなく、ことによるとお貞さんという存在が兄の神経症を引き起こす重大な要因の一つとなるべく計画されていたのではないだろうか。

そういえば、この『行人』という小説はお貞さんの結婚の使者として二郎が大阪に下ることから始まって、お貞さんの結婚の成就ということで、物語の大半（帰ってから「まで」）が終っている。漱石のもともとの意図もここまでで何等かの決着をつけるつもりであったということからすると、これはきわめて意味深い。その間和歌

山で兄が非常識と思える言動を始めかけ、東京に帰ると神経症を益々こじらせて行つたのである。

それも続く「塵芳」篇がなかったとすれば、お貞さんの結婚と下阪をもって、『門』のエンディングに見たように「事の起りそうで事の起らない」「規定の日程を平凡に繰り返して」冬は去つて行き、物語は終焉を見たはずである。

さて大胆な仮説のことはさて置くとして、私が言いたかったのは、お貞さんの結婚式を期にして兄夫婦間のきしみが、はつきりと二郎の眼にも見えるように表面化したということである。そして二郎の語りは「帰ってから」のお貞さんの結婚と冬の終わりでもって終焉するのではなく、もつと複雑な意味を持つ「塵芳」篇へと語り継がれてゆくのである。

*

「塵芳」の冒頭は、冬が去り若者の血を沸き立たせる春が二郎にも訪れたことを告げるところから始まっている。語り手が仕事を終え、下宿に帰り夕飯をすませ、火鉢を前に煙草をふかしながら「茫然自分の未来を想像」(「塵芳」一)していると、「その未来を織る糸のうちに」は、自分に媚びる花やかな色が、新しく活けた佐倉炭の

焰と共にちらちらと燃え上がるのが常であつたけれども、時には一面に変色してどこまで行つても灰のように光沢を失つていた」(同)。

二郎が「想像の夢」の中で自分の未来を織る糸が、ここには少なくとも二本描き出されているのに注目したい。一つは「自分に媚びる花やかな色」の糸である。これはたとえば三沢が紹介の労を取ると約束してくれている二郎の花嫁候補を示唆する糸であろう。もう一つは「一面に変色してどこまで行つても灰のように光沢を失つた糸である。」

この小説の前の『それから』そして『門』を読んだ読者諸氏は、『それから』では人工の世界つまり「緑」の世界が、現実の世界つまり「赤」の世界へと変化したことと、そして『門』にあつてはその「赤」の世界が結婚による酸化作用を経て「灰色」にそして「黒」に変化していったことを憶えておられよう。幾度も引合に出して恐縮だが、この変化のプロセスを私は拙著『山頂に向かう想像力』の『それから』と『門』を論じた中で説明しておいた。

今二郎が想像の夢の中で織り出して見せる第二の糸は「常」にはその姿を現しはしないが、「時には」出現する

糸なのであり、「変色し」「光沢を失つて」「灰」色になるその糸とは、何を隠そう、『門』における宗助とお米の関係を象徴する糸、つまり『行人』においては二郎とお直の結婚を意味する糸以外にはないのである。

「塵芳」の冒頭からして漱石が何を語り手に語らせようとしているかが、これでおわかりであろう。さよう二郎は三沢の周旋する新しい花嫁を迎えるか、あるいは一郎からお直を奪って、宗助お米のような灰色の人生を歩むか、その二者択一を考えているのである。確かに後者の方は「時には」とあって、「常」ではない。しかしその可能性もあるということの意味する。

そのように可能性を示唆しておいて、語り手はその可能性のよって来たる当の本人の姿を下宿の火鉢の前に描き出すのであるから、始末が悪い。いや語り手の腕はしたたかという他はない。

寒い風が吹き降り出した雨の中をやつて来たお直の頬は、「何時もより青白く自分の眸子を射た。不断から淋しい片鱗さえ平生とは違った意味の淋しさを消える瞬間にちらちらと動かした」（「塵芳」二）。

これがお直を見た瞬間の二郎の観察である、これまでも私は二郎の観察するお直の容姿を、「柔らかい青大

将」、風呂上がりの「手触りを挑むかのような」柔らかく「肌理の細かい皮膚」などという表現に見てきた。これらの描写が示唆するのは、お直に対する二郎の性的な視線、あるいは男としての視線である。二郎の眼は嫂の女性としてのエロスに注がれているのがわかる。

先ほどの引用が示すように二郎の観察はきわめて鋭く、かつ細かい。「何時もより青白」い頬とか「平生とは違った意味の淋しさ」を瞬時にして捉える動物的な眼である。

その眼はすぐさま火鉢の前に差し出された「白い指」に注がれるやいなや、女の華奢な手と足への言及へと語り手を導いている――

彼女はその姿から想像される通り手爪先の尋常な女であった。彼女の持つて生まれた道具のうちで、初から自分の注意を惹いたものは、華奢に出来上ったその手と足とであった。（同）

嫂の訪問など予期していなかった二郎は、気を動転させ、火鉢に手をかざすことも出来ず、嫂の「ジョコンダに似た怪しい微笑の前に立ち竦くまざるを得なかった」

(同)と白状している。

そしてこれまで吹いていた風は落ち、代わりに「雨の音が窓の外で蕭々とした」(同)。雨に降り込められ、夜に閉ざされた二人に、『それから』の三千代と代助に下ったような慈雨が降り、二人をブリスに導く瞬間が近いように漱石の読者をはらはらせる。だが二郎は火鉢に手はかざすものの、「勢い後へ反り返る気味で座を構えなければならなくなった」(四)。「小胆」で「卑怯」と自認する二郎には、雨は慈雨に変わらず、ブリスは降るはずもない。

それでも二郎は「彼女の富士額をこれほど近くかつ長く見詰めたことはなかった。自分は彼女の青白い頬の色を煽の如く眩しく思った」(同)と語っている。身を引いてお直のエロスから逃れようとしながら、その視線は、つまり心の方は、彼女のエロスの激しい虜になってしまっているのである。

お直のエロスとの対決の一方で、二郎は彼女と兄との関係を、突然彼女の方から言い出され、「卑怯な自分は不意に硫酸を浴びせられたようにひりひりした」(四)という。二郎が家を出た後も「唯好くない一方に進んで行くだけであるという厭な事実」(同)の前にたじろぐ

二郎は、その「氣不味さの近因」を尋ねるが、嫂は知らぬという。二郎は嫂が知っていてわざと知らぬ振りをしているのか、本当に知らぬのか迷うが、彼自身はこれまでその近因が自分にあるのだと思ってきた、あるいは思いこまされてきたわけだから、うかつにそれには触れられないわけで、これまで嫂に対して兄のことへの言及は、恐れと卑怯から避けてきたのである。

そのような二郎とは対照的に、ここでも「畏れない女」といわれるお直の、私の言葉でいうと、〈則天去私〉的な性格が語られる。

「どうせ妾がこんな馬鹿に生れたんだから仕方がないわ。いくらどうしたってなるようになるよりほかに道はないんだから。そう思って諦らめていればそれまでよ」彼女は初めから運命なら畏れないという宗教心を、自分一人で持って生まれた女らしかった。その代わり他の運命も畏れないという性質にも見えた。(四)

運命ならそれに従容として従うまでのこと。お直は和歌山の一夜でも二郎さえその気なら一緒に海に飛び込んでもよいと言ったように、今もまた親の手で植え付けら

れた「鉢植」の自分を、二郎に度胸があるのなら動かして見せよと挑発するのである。

「男は厭になりさえすれば二郎さんみたいは何処へでも飛んで行けるけれども、女はそうは行きませんから。妾なんか丁度親の手で植え付けられた鉢植のよなもので一遍植えられたが最後、誰か来て動かしてくれない以上、とても動けやしません。凝としているだけです。立枯になるまで凝としているより外に仕方がないんですもの」（「塵勞」四）

いくら挑発され、謎かけをされても臆病者の二郎には、この言葉が逆に「計るべからざる女性の強さ」と映り、その強さの前にまたしても怯むのである。

二郎が彼女を動かさねば、あるいは兄がお直の正体を見届けようとして彼女を精神病にまで追い込むのを断念しないならば、お直はまさに「立枯れになるまで」凝として「計るべからざる女性の強さ」を兄に押し付けて、二郎が恐れるように、逆に兄を狂気の果てにまで追いやることになるであろう。

お直は対象に従って、対象の動きのままに動くという

のであるから、兄が変わるか、あるいは二郎が彼女を動かすか。動かすとすれば、夢に描いたように「灰」色の糸を選ぶことになる。あるいは兄夫婦をそのままに放置するか。放置すれば「自分に媚びる花やかな色」の糸を選ぶことになる。

しかし二郎にはこの最後の決断は出来そうには見えな

い――
彼女と兄との関係が悪く変わる以上、自分の身体がどこにどう飛んで行こうとも、自分の心は決して安穩であり得なかった。（五）

しかも、我々が見てきたように、これまで徐々にその浸透力を増してきた嫂のエロスがついに二郎のひ弱な自己防衛の鎧を貫き、完全にその心臓に達したといつてもよいのではないか。嫂の帰ったあと二郎が思い描く「嫂の幻影」は、まさにこのことをよく物語っている。

その晩は静かな雨が夜通し降った。枕を叩くような雨滴の音の中に、自分は何時までも嫂の幻影を描いた。濃い眉とそれから濃い眸子、それが眼に浮ぶと、青白い顔

や頬は、磁石に吸い付けられる鉄片の速度で、すぐその周囲に反映した。彼女の幻影は何遍も打ち崩された。打ち崩される度に腹同じ順序がすぐ繰り返された。自分は遂に彼女の唇の色まで鮮やかに見た。その唇の両端にある筋肉が声に出ない言葉の符号の如く微かに顫動するのを見た。それから、肉眼の注意を逃れようとする微細な渦が、靨に寄ろうか崩れようかと迷う姿で、間断なく波を打つ彼女の頬をありありと見た。

自分はそれ位生きた彼女をそれ位劇しく想像した。そうして雨滴の音のぼたりぼたりと響く中に、取り留めもない色々な事を考えて、火照った頭を悩まし始めた。
〔塵勞〕五)

この雨の象徴性については、もはや何も言う必要はないであろう。『それから』における性的結び付きの象徴としての雨は、ここでも降っている。ただし『それから』の代助と三千代の二人を降り込めたようにではなく、二郎の頭の中にのみ降っているのではあるが。

代助同様に「火照った頭を悩まし始めた」二郎は、兄弟夫婦の關係の悪化について唯彼のみを選んで話をしたお直の意図は一体何であろうかと反芻するがわからない。

二郎にわかるのは結局細部は決して語ろうとはしないお直に「焦慮された」ということでしかない。それにもかかわらずお直が彼に仕掛けてきた「狎れ狎れし」い態度や、「愉快な悪戯」(五)を思い出しては、エロスの虜となった自分の姿を臆面もなくさらけ出してはばからない。

彼女は火鉢にあたる自分の顔を見て、「何故そう堅苦しくしていらつしやるの」と聞いた。自分が「別段堅苦しくはしていません」と答えた時、彼女は「だつて反つ繰り返つてるじゃありませんか」と笑った。その時の彼女の態度は、細い人指ゆびで火鉢の向側から自分の頬べたでも突つきそうに狎れ狎れしかった。彼女はまた自分の名をよんで、「吃驚したでしょう」といった。突然雨の降る寒い晩に来て、自分を驚かして遣つたのが、さも愉快な悪戯でもあるかの如くいった。・・・ (五)

これはあの和歌山の一夜のときと比べると、二郎の側の格段の進歩である。もはや我々はこれをもって二郎が恋の虜になったと呼んでよいのではないだろうか。

嫂に会ってから数日間、嫂の幽霊に祟られ、仕事も手に付かない二郎は、ところ構わず出現する様々な嫂像——則天去私の女、己を表出しない女、忍耐の権化としての女など——に心を捕われ、「他の知らない苦しみを他に言わずに苦しんだ」（二六）と告白している。これは二郎自身が自覚している自分の神経症が一段と高じたことの証左以外の何物でもない。今では嫂との接触によって、さらにそれが加速されたわけだ。自ら「祟」（二六）と称するのは当を得ている。

どうやら兄が嫂に打擲を加えたのではないかと想像する二郎であるが、番町の家に行つて事実を確かめるのが怖くて出来ないでいると、ついに父が下宿に向いて来、二郎を一日散歩に連れ歩いた後、番町の家に行きさせる。家に寄り付かない二郎を皆に会わせ、近頃沈みがちな家の雰囲気明るくしようとする父親の配慮である。一郎はこの父を誠がないと非難したが、なかなか気のつく父親ではないか。

二郎の予想通り、番町の家に見出したのは兄一郎に対する不平である。「陰鬱な彼の調子は……段々陰悪の一方に向つて真直に進んで行く」（十二）というのである。そこで二郎は両親と相談の上、兄に旅行を勧める事

にするわけである。

そこで三沢の保証人でもあつて、一郎の親友でもある日さんを煩わせて、気分転換の為の旅行に兄を連れ出してもらうことにするのであるが、学校の春休みには兄の説得は間に合わないで、結局夏休みを迎えて旅が実現する。その間二郎は三沢からも、日さんからも兄さんのことより、彼自身が結婚したほうがよいのではないかという忠告をうけている。

三沢は「可憐なオフィリヤ」を連想させる油絵を自分で描いて、それを壁の上にピンで貼付けている。モデルは例の「黒い大きな眼」を持った出戻りの精神病の娘さんである。だが最近三沢は以前と違って「健康と幸福」そのもののような陽気な表情をしており、新たに結婚するという。そして「もう大きな黒い眼を有つた精神病のお嬢さんについては多くを語らなかつた」（十六）。

三沢はすでにその娘さんの幻影から抜け出したのであつて、二郎には「彼は来るべき彼の生活に、彼の有つていた過去の詩を投げかけていた」と映る。「過去の詩」とは精神病の娘さんに抱いたような誠実な愛を指すのであろうが、娘さんその人にはもはや拘泥しないところから、結婚に踏み切ることが出来るわけだ。

ところがこの三沢と対照的であるのが二郎である。二郎はますます嫂の虜になり、彼女の「幻影」から離れられなくなっている。三沢にとって「娘さん」は過去であるが、二郎にとってお直は現在であり、また未来でもありうる。だから三沢は二郎に、「君兄さんを旅行させるの、快活にするのって心配するより、自分で早く結婚した方がよかないか。その方がつまり君の得だぜ」(十六)というのである。そして相手を紹介してやるという三沢は、雅楽稽古所に二郎を招待し、実際にそれとはわからぬように女の顔を見せてやるのである。

だが二郎がその女のことには氣をとられるのはひとときに過ぎず、「その当日のぼつとした色彩が剥けて行くに連れて、番町の方「つまり兄と嫂」が依然として重要な問題になって来た」(二十一)。

兄の旅行のことで依頼に行く日さんからも、三沢同様に、「ところが万更」「三沢は」世話好きばかりで遣っているんでもないようですよ。だから君も好い加減に貰っちゃったら好いじゃありませんか」(二十四)といわれるのである。恐らく日さんは三沢から二郎と嫂のことは聞いてある程度知っているものと思える。だがここでも二郎は二者択一を迫られ、決意を固めることは出来ない。

自分は日さんの門を出て、あの事も早くどうかしなれば、三沢に対して義理が悪いと考えた。しかし兄の問題が一段落でも片付いてくれない以上、到底そつちへ向ける心の余裕は出なかつた。(二十三)

「兄の問題」はつまり「嫂の問題」であり、結果的には「自分自身の問題」である。これにすぐ続けて語り手は、「いっそ一思いにあの女の方から惚れ込んでくれたならなどと思つても見た」という暗示的発言をしているが、この仮定法の帰結の節を補うと、「嫂のことは忘れ去れるのに」ということになる。

とにかく二郎は明かに三沢の勧める候補者とお直との間での二者択一に直面し、迷っている。これは拙著『山頂に向かう想像力』でも書いたが、このことを決定的に表明しているのが、日さんを付けて兄を旅行にいかせることの真の理由の報告部分である。残念ながら、私の知る限り『行人』の批評で、この所を指摘した論は見たことがない。

二郎は以下のように、明瞭に自分の利益の為に日さんを利用しようとするのである。

自分は旅行が兄のために有利であると認めたから、Hさんを煩わして、これだけの手続きを運んだのであるが、真底を自白すると、自分の最も苦に病んでいるのは、兄の自分に対する思わくであった。彼は自分をどう見ているだろうか。どの位の程度に自分を憎んでいるだろう。また疑っているだろう。其処が一番知りたかった。(二十一)

「兄と自分との間に横たわる一種特別な関係」(二十二)については、三沢が憶測を述べているかもしれないが、自分からそれを告白することは出来ないと思う二郎は、「兄の自分に対する思わく」のみをHさんから報告してもらいたいとは言えず、「やむをえず特殊な問題を一般的に崩して」(二十二)、「とうとう嘘を吐い」(二十三)てまでも、兄に関する報告をするという約束をHさんに取り付けるのである。

嫌がるHさんに報告を執拗に願ひ出る二郎の意図は明白である。兄の二郎に対する「思わく」の内容次第で、二郎は三沢の取り持つ結婚の話に返答するつもりでいるのだ。

三沢の婚約者の友人という女性に、先ほど述べたよう

に、自然の形で雅楽所で会った二郎は、その出来事を家の誰にも話さないし、また自分から三沢にどうにかしてくれとも言う気になれないでいる。そこを妹のお重が情報を仕入れて来て、皆の前ではらしてしまふ。

結婚に関する二郎の曖昧な態度は、一人称語りの不確実性を示す好例である。

三沢は「愚図々々」している二郎の態度を評して、「一家の主人となるか、他の夫になるとかいう方面には、故意に意志の働きを鈍らせる」(二十四)という。またお重からは、

「兄さんが妾達に黙っているのは、きっと打ち明けて云い悪い訳があるからなのよ。ね、そうでしょう、兄さん」(二十七)

と皮肉られている。

勿論お重は暗に嫂の存在に言及しているのだが、兄がHさんと旅立ったと知るや、自らも認めているように、「現金」に番町の実家に飛んで来るのは、いかにも二郎らしい。そして兄の不在が如何に二郎の心を陽気で、活発にしているかは一家団欒の様子を見ればよくわかるだ

ろう。

（このあたりのことは拙著『山頂に向かう想像力』の中で十分に書いてはいるが、論の展開上、重複を覚悟で書いておく。）

番町に来た二郎の嫂に対する観察は相変わらず細かい。

気のせいかわ嫂はこの前見た時よりも少しやつれていた。頬の肉が心持減ったらしかった。（二十五）

嫂が二郎の下宿を訪れたとき、はじめて彼女の夫に対する不平を口にしたが、今度夫の旅に立ったことに關して、明白に、夫が彼女に愛想づかしをしたと断言する。

「愛想づかしに旅行したというんですか」

「いいえ、愛想を尽かしてしまつたから、それで旅行に出掛けたというのよ。つまり妾を妻と思つていらつしやらないのよ」（二十五）

この嫂の「愛想を尽かして云々」の発言は、Hさんの手紙の中にある同様の文句とコレスポンドして重要な意

味を帯びてくる。旅行中一郎から頭を殴られたこともあるHさんだが、

それでも私は貴方の家庭の凡ての人の前に立つて、私はまだ兄さんから愛想を尽かされていらないという事を明言できると思います。（四十六）

と述べている。

愛想を尽かされたお直とそうでないHさん。この文句は何を語っているのだろうか。ある意味では一郎とお直の夫婦関係はこれで終焉したとも思える。

二郎はかつて兄からお直の節操を試すようにと探偵の依頼を受けたが、今や彼は立場を逆にして、自らがHさんを探偵に仕立てて兄の自分に対する思わくを探らせようとしているのである。この点も拙著で述べたところであるが、本当に神経症にかかっているのは、今や一郎ではなく、二郎その人ではないか。そして皮肉にも、Hさんは二郎が求めてやまないへ自分に対する兄の思わくへ一言も手紙の中には書いてこないものである。ただ「貴方に関しては一郎という名前さえ口にされませんでした」（三十七）という簡単な文句のみである。

これは何を意味するのであろうか。Hさんは一郎が父および母そして殊にお直を「偽りの器」(三十七)と看做していると報告している。その「偽り」の原因については一郎は何も言わないし、Hさんも聞こうとは思わない。そうしたコンテクストの中で、「ただ御参考までに一言注意して置きますが」(三十七)と書いて書いているのが、先ほどの文句「貴方に関しては云々」である。

これは何を意味するのであろうか。別の所でHさんはこちらも言っている。つまり気むづかしい兄さんとうろして旅をして差し向かいで暮しても、それほど苦痛は感じないといい、

貴方も同じ兄さんについて同じ経験をなさりはしませんか。もし同じ経験をなさらないならば、骨肉を分けた貴方よりも、他人の私の方が、兄さんに親しい性質を有って生まれて来たのでしょうか。親しいというのは、ただ仲が好いという意味ではありません。和して納まるべき特性をどこか相互に分担して前へ進めるといいうつもりなのです。(四十六)

このHさんの言葉のうちに、私は、この小説の結論が

すべて内包されているように思う。「和して納まるべき特性をどこか相互に分担して前へ進める」のは、明かに嫂でもなければ、二郎でもない。「二郎という名前さえ口に」しない兄の二郎に関する思惑が如何なる内容のものであるかは、このHさんの説明にすべて尽くされているように思う。

Hさんは手紙の最後に、「兄さんの頭を取り巻いている雲」(五十二)を散らしてやるようにという課題を二郎をはじめ家族の者に押しつけているが、「和して納まるべき特性をどこか相互に分担して前へ進」むことの不可能な二郎やお直には、Hさんからのこの課題は果たせそうにはない。

もしそれが散らせないなら、家族のあなた方には悲しいことが出来るかも知れません。兄さん自身にとっても悲しい結果になるでしょう。こういう私も悲しゅう御座います。(五十二)

〈兄の頭を取り巻く雲〉を散らしてやれない二郎は、〈愛想を尽かされた〉お直を結婚相手に選ぶことになるのであろうか。それとも三沢の勧める相手を選ぶのである

ろうか。

二郎の足取りは杏として知れない。

(一九九六・九・一二)